

日本キリスト教会大阪北教会

2016年8月14日 子供・大人合同礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書12章20～26節

12:20 さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。12:21 彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いです。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。12:22 フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。12:23 イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。12:24 はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。12:25 自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。12:26 わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」

《説教》『一粒の麦、地に落ちて死なずば』

◆今日は8月14日、第二主日であります。明日は8月15日、終戦71年目の記念日であります。私たちは今、大事な時を迎えております。そのような時に当たって、今日の聖書を通して主の御言葉を賜りたく思います。ところで、今日の箇所をご覧になりますと、私たちがよく覚えている御言葉が24節にあります。「はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結ぶ」。このようにイエス様はおっしゃっておられます。そしてこの一粒の麦がイエス様ご自身を表すものでありますし、また、このイエス様の御言葉を聞く私たち一人一人のことであります。端的に言えば、「あなたがたも一粒の麦として死んで、豊かに実を結ぶものになるように」とおっしゃっているのです。

◆それならば、「死ぬ」とはどういうことなのでしょう。そのことが今日の箇所に記されているのでありますが、今の「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである云々」との例えの御言葉はわかりませんが、その前後の御言葉はそれほど分かりやすくはありません。私にとってもそうであります。近頃、このヨハネによる福音書を読んでおりますけれども、読み切れないイエス様の御思い、それを証しているヨハネ福音書の広さ、深さは測り知れないものがあることを覚えます。読む度に圧倒され、ひとたびはお手上げ状態になります。そしてもう一度、気を取り直して、この箇所を通して、主は何を求めておられるのか、そのことを求めて、ようやく皆さんと一緒に礼拝をすることになるのであります。

◆実は今朝8時から9時半迄、北海道新聞の記者、椎名宏智さんの取材を受けました。48歳の方で、「信時潔」さんに関わる取材です。信時さんは当教会の初代牧師・吉岡弘毅牧師の三男さんで、当時の信時義政長老の養子になり、大阪府立市岡中学を出て、東京芸大に進み、昭和12年にNHKの委嘱を受け、あの「海行かば」を作曲された方です。千曲近い校歌、社歌を作曲しておられます。その事は私も知っておりましたが、実は、現釧路湖陵高校の校歌を昭和3年＝1928年に作曲しておられます。40歳のころです。作詞は当時釧路中学の教師で寺の住職でもあり、菅原道真の子孫になる菅原覚

也さんという人です。椎名記者は校歌に関し広く追及している人で、ご自身も現住職の御子息です。日曜日の朝でどうかと思いましたが、親子合同礼拝でしたので、朝の早い時間ならと取材に応じたのですが、受けてよかったと思いました。

◆というのは今日の聖書の箇所についてもいくつか、いくつかの参考書が「よくわからない」と言っています。例えばここに「何人かのギリシア人がいた」とありますが、「ギリシア人とユダヤ人」という表現で、当時の世界の全ての国民を表わすことができました。そのギリシア人がイエス様を訪ねてやって来たわけです。それで彼らはガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとに来て「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだのです。すると、「フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した」とあります。主イエス様の12弟子は皆ユダヤ人ですが、「フィリポ」も「アンデレ」も、これはギリシア名です。アンデレの兄はペトロです。アンデレが先にイエス様に会い、兄のペトロをイエス様に引き合わせます。そして、ペトロもイエス様の弟子になります。そういうことがこの福音書の1章に書かれております。私たちは「ペトロ、ペテロ」と言い慣れています、が、「ペトロ」もギリシア名ですね。ペトロは正式には「ヨハネの子・シモン」と言いましたね。

◆記者の椎名さんも千葉の柏で住職をしておられる方の息子さんです。その人が菅原道真の子孫で住職でもあった人が作詞し、それを大阪北教会出身の信時潔氏が作曲した「釧路中学校歌」の取材をしておられる。そういう出会いと成りゆきに驚かされました。信時潔氏は、勿論聖書を深く読んでおられます。そして日本の古典中の古典、「万葉集」もよく読んでおられます。信時さんが最後に取り組んでいたのは「万葉集」だと言われています。因みに「海行かば」は万葉集の伴家持の詞に曲を付したものです。信時さんの課題は、聖書と万葉集を、自分なりに整理、統合し、或る意味で、日本が歩むべき道を探る所にあつたのではないかと、そしてこれは、私たち一人一人の喫緊の課題でもあるのではないかと、取材に応じ乍ら思うに至りました。この日本に生まれ、神様に捕えられ私たちもキリスト者とされました。そして戦後71年の今、いつか来た道に戻りかねない時代状況にあって、我々は、ここでどの道を選択せねばならないのか。平和に至る道を、真剣に問わねばならないと思います。

◆それで「ギリシア人とユダヤ人」で世界のすべての国と人々を象徴できると申しました。そのギリシア人がユダヤ人の過越祭の時エルサレムに来て、イエス様にお目にかかりたいと言っているわけです。それで彼らはフィリポのもとに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだのです。この「お願いします」という言葉はギリシア語では「キュリエ」という言葉で、これは「主人」とも「主」とも訳される言葉ですが、圧倒的に「主」の意味で使われています。

ギリシア人たちは過越祭の祭にやって来ます。そして、その祭を主宰するユダヤ当局者から「こんな奴は生かしてはおけない」と睨まれている主イエス様を訪ね、主イエスの弟子を「キュリエ！」と恭しく呼んでおります。これは相当の敬意を表しています。当時、真の意味で「主」と呼ばれたのは、ローマ皇帝とイスラエルの神だけです。そういう時代状況の中でこれらギリシア人たちは、イエス様の弟子に「主よ」と呼び掛けています。彼らの主イエス様に対する桁外れの敬意・畏敬が伺えるのであります。

◆ところで使徒パウロは、コリント前書 1 章 22 節で「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしは十字架に付けられたキリストを宣べ伝えています」と言っています。パウロの言わんとする所は、キリストの奇跡的なしるしでも力でもなく、またギリシャ人が追究する高度の知恵でもなく、弱さの極みと言ったらいいか、奉仕の極みと言ったらいいか、十字架のイエス様をひたすら宣べ伝えていますと言うのです。ですからユダヤの民衆が、そして今日のギリシア人がイエス様に認めたもの、そしてその弟子たちにも認めたものは、知恵とか力とかしるし・奇跡であって、それらはイエス様の伝道においても顕著なものだけでも、それらもまだまだ表層的な事柄であって、イエス様が追究し、生きておられる実相からは、かけ離れているという事です。その事をイエス様は今日の箇所を示しておられるわけです。

◆ギリシア人の来訪を受けて、イエス様は、「人の子が栄光を受ける時が来た」と言われました。「人の子」という表現は、イエス様の自称ですが、「メシア＝キリスト」のことです。終末時の「審判者・救済者」のことです。「人の子が栄光を受ける時が来た」とは、歴史も文化も違うギリシア人が、その違いを越えて、ユダヤ人のイエス様のところへ来て、その弟子にさえ「主よ」と言うほどの深い敬意を示したのです。もうユダヤ人とかギリシア人とかいう境界を越えているわけですね。ところがイエス様、「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」と言われます。この譬えはそれなりに誰にでも分かることです。しかし、「自分の命を愛する者はそれを失うがこの世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」とも言われます。このあたりからイエス様の弟子もギリシア人たちも、だんだんとイエス様について行けなくなります。

◆ところで命も徴も知恵も、これらはこの世の「善きもの」です。しかし、それらを愛する者はそれを失うと主イエスは言われ、「自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」と言われます。この世で自分の命を憎む人はまずおりません。「この世で自分の命を憎む人はそれを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者はわたしに従え。「そうすれば、わたしのいるところに、私に仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば父はその人を大切にしてください」。このように主が語られる時、主の弟子達もギリシア人たちも、主の御言葉を素直に聞く事はできません。

◆ここで主イエスが言われているのと同じ趣旨の事を、マルコ福音書で繰り返し語られます。8 章 31 節以下で、「イエスは人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」と弟子たちに教え始められた。しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。『サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。』それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。『わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。』わたしたちは今、大事な時の別れ道にあるのですが、自らを省みて、主イエスが示される道に歩いて来てください。

◆私たちは先月の教会全体協議会で「今、教会に必要なことは」というテーマで4人の兄弟姉妹の発題を聞き、みんなで考えました。しかし「今、教会に真に必要なこと」或いは「今、教会の頭なる主が、求めておられること」と問い直して、今日の聖書を読むならば、主は「わたしに従いなさい」と言われます。「従う」という言葉は「同じ道を行く」という言葉です。主はこう言われた数日後に、十字架にかけられるのです。それがイエス様の歩まれた道なのです。イエス様の十字架の意味を、私たちは色々と限りなく読むことができます。けれどここにこそ神様の極まりない愛が啓示されているのです。イエス様は十字架において、一粒の麦として死にきられる中に、わたしたちにたいする限りない愛がそこで実行されているのを覚えます。

◆先週火曜日に日曜学校の夏期学校を行いました。その時、子どもたちと一緒に、ヨハネによる福音書 15：11～17 節を読みました。「これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはやわたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、またわたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」一粒の麦として地に落ちて死ぬことは、イエス様と一つにされて、死んでも死なない命に生かされることです。26 節以下でこう言われます。「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる」と。「仕える」という事は「奉仕」です。主イエスに従って愛に生きる事こそ奉仕です。その時、多くの実がなるのです。

◆まだイエス様のことが真に理解できていない弟子たちでさえ「主よ」と呼ばれているのです。私たち一人一人が本当に一粒の麦として、イエス様に従って、この世で命を憎んで死ぬ時、主が喜ばれる、神様が喜ばれる実が初めてなるのです。私たちも日本人として生まれ、この国の歴史の中で一粒の麦として死ぬ時、神の栄光が現れるのです。パウロは「ギリシアの競技者は『朽ちる冠』を得るために節制に節制を重ねる。キリスト者は『朽ちない冠』を得るためにそうする」と言います。これがイエス様を主と仰ぐ私たちの日常でなければ、神様の御栄は現われないのではないのでしょうか。

◆お祈りいたします。

隣み深い主イエス・キリストの父なる神様

どうかこの日本も世界も分かれ道であるこの時に、どうかあなたが身をもって示し、そして聖書を通して今示してくださる御言葉を聴き従って一粒の麦として、この地に世界に平和を生み出すことに貢献できるわたしたち1人1人であらしめてください。

この祈りイエス様の御名を通しみ前にお捧げいたします。アーメン。